別紙２

論文審査の結果の要旨

氏名　菊田　悠

菊田悠氏の論文、『青い陶器の町の聖者－ソヴィエト近代化を経たウズベキスタン･イスラームの民族誌』の目的 は、中央アジアのウズベキスタン共和国におけるイスラーム信仰実践がソヴィエト近代化によって受けた影響と今日の姿を、陶業を主要産業としてきたフェルガナ州リシトン市の陶業史と、陶工の守護聖者（ピール）崇敬の変遷を主たる対象として考察するものである。この研究を始めるにあたって、論者には、ソヴィエト連邦時代に進んだ近代化、「ソヴィエト近代化」が、イスラームといった宗教伝統や、伝統的な社会システムを、どのように変容させたのか、またはさせなかったのか、を探ろうとする意図があった。

リシトンにおける調査は、論者が同地で日本語教師を務めながら、２００２年３月～７月、同年９月～２００３年１月、同年３月～７月、同年９月～１１月に行われた。また、２００４年以降は、２００５年を除いて、毎年一ヶ月程度同地を訪れ、追加調査を行った。

本論文は、「序」に始まり、３部に分れた全８章が続き、最後に「結」が置かれる。「序」で先行研究を概観し、調査の概要を記した後、第１部「フィールド紹介と分析の枠組み」では、第１章で陶業の町として栄えたリシトンの歴史、現在の生活など調査地の全体図が示されたあと、第２章で、本論文の理論的な分析枠組みが説明される。これまで旧ソ連邦のイスラームには、ベニグセンらによる、国家的な「公的イスラーム」とそれ以外の「並行イスラーム」とに二分する見方が取られてきた。しかし、それら二項対立的な図式からは、ムスリムの生活における具体的な信仰の姿が見えにくい。そこで論者は、ギアツの地域的イスラームの捉え方をヒントに、2つの原理と７種の指導者によって捉える構図を提案する。それによれば、イスラーム知識人は、宗教的知識を重んじる「イルム原理」によって地域社会で重んじられている。一方、指導者であるイシャーン、預言者ムハンマドらの血筋とされる「白い骨」の人々、占いや病治し等をするバフシ、キンナチといった、神の特別な恩寵に恵まれた人々は、彼らを通じて請願成就や病治しが可能であるという観念、「アウリヨ原理」によって崇敬されている。この他に「見えない聖者」として聖者廟の主や、職業別の守護聖者、「ピール」が尊敬されている。論者は、彼らは「見えない」ためにソ連時代に弾圧されることが少なく、人々のムスリム意識維持において大きな役割を果たしてきた、という仮説を示す。

第２部「陶業とピール崇敬の変遷：ソ連時代を挟んで」は四章からなる。第３章から第５章の議論では、二つの発見が記述される。一つは、陶工の組織形態や生産内容は効率的な大規模生産を目指したソヴィエト近代化によって大きく変化したが、徒弟制という伝統的な技能伝承のシステムはほとんど変わらずに受け継がれたことである。その徒弟制によってピール崇敬の多くの要素が受け継がれてきた。さらに、ウズベキスタン独立後、国営陶芸工場が解体し、陶器作りの場が市内に拡散したが、そこでのピール崇敬を検証する

ことによって、集団的なピール崇敬は一部の陶工に限られているが、ピールへの尊敬自体は、いまだ陶業従事者全てに基本的に重要視されているという、第二の発見がなされた。

第６章は、「スーフィー・聖者複合」の研究の流れを追い、ゲルナーの提出した、こうした聖者信仰は、近代以降では教典主義や合理主義を重視する世界的な状況の中で次第に周縁化せざるを得ない、という説に反論を加える。論者によれば、現代社会への適応に成功したスーフィー･聖者複合の事例は存在する。特に、論者の調査したピール崇敬では、強力に推し進められた「ソヴィエト近代化」にもかかわらず、徒弟制の下で育ったエリート的な陶工のあいだで、その力は保たれている。さらに、市場経済化のなかで個性的な作家になろうとする新世代の陶工にとっては、創造のインスピレーション源としての新たな価値をも帯びてきている。これはスーフィー･聖者複合の今日性を考える上で示唆的な事例と考えられる。

第３部「仲介者のいるイスラーム信仰実践」は、二章からなる。第７章では、これまでの議論とは視点の異なる、死者儀礼であるルーフ儀礼を取り上げ、そこに、「宗教的に優れた仲介者に頼る」という中央アジア･ムスリムの宗教的伝統が反映されていることを明らかにする。そうした、仲介者の存在は、第８章で取り上げられるピール崇敬にも見られる。すなわち、ピールや聖者廟の主たちは、「見えない」が完全に死んだわけではなく、人々と神との間を取り持つ仲介者として、また、死を挟んだ二つの世界の間をも仲介している。

第８章から「結」に至る議論は、本章の結論部をなしている。そこで論者は、ソヴィエト近代化とは、単なるロシアによる植民地化や西欧化、ロシア化とはいえない。そこには、民族主義を超えた理想の連邦を目指すイデオロギーがあったのであり、社会建設のプロセスに地元民も参加し、ソヴィエト近代化を共に築いてきた側面が存在した。それゆえに独立後も、ソヴィエト近代化は全否定されることはなく、政教分離を基本路線とし、イスラームの政治化を抑える現政権への支持が保たれてきた、と主張する。しかし現今の情勢を見ると、ポスト･ソヴィエト時代の再イスラーム化の中で、宗教的知識を重んじるイルム原理は強まる一方、聖者的な存在に頼るアウリヨ原理も新たな力を増している。ピールら「見えない聖者」や、霊験あらたかなイシャーンや「白い骨」も現れ始めている。彼らを崇敬する人々と、イスラームの政治化を警戒する政権および正統的解釈を唱える宗務局の間で、今後衝突が起こらないとも限らない。現代のウズベキスタンが、こうした衝突をはらんだ緊張の下にある、ということは、とりもなおさず、ソヴィエト近代化が結局「見えない聖者」への崇敬や「宗教的に優れた仲介者に頼る」人々の姿勢を崩せず、当地を世俗化することができなかったということを示している。

上記の内容を持つ本論文は、以下の三点において、文化人類学に対する貢献が顕著である。第一に、困難な調査をやり遂げ、現場に密着した詳細なデータを取得し、確固とした民族誌を提示した。第二に、「ソヴィエト近代化」という概念を設定し、それに照準を定めて執拗に検討することで、ウズベキスタンにおける近代化が、単なるロシアによる植民地化やロシア化、一過性のもの、ととらえるのは誤りで、いまもこの地の人々の中に、内在化されたものとしてあり続けていることを指摘した。その上で、そのソヴィエト近代

が、生産システムの中核をしめる徒弟制や、彼らのイスラーム実践の重要な側面であるピール崇敬などには、大きな影響を与えてこなかった、ということも明らかにし、多面的な様相を持つことを論証した。第三に、そうした議論を通じて、思想的近代化が信仰実践の持続と両立しうるという事例を、無神論を公的イデオロギーとしていたはずのソヴィエト近代化のプロセスのただ中に見出した。

むろん、本論文にも問題点がないとはいえない。審査委員からは、いくつかの表記法の不十分さ、二項対立的図式を批判しながら自らそうした図式を用いていること、また、近年、文化人類学的儀礼研究では否定されて来ている「儀礼の意味」を、再び取り上げるためには必要であるはずの再批判的検討の不足、などが指摘された。

しかしながら、こうした点は、本論文の本来の価値をそこなうものではなく、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。